トルコ共和国で活躍した外国人建築家

山下王世

祖国解放戦争（一九一九〜二二年）に勝利し、独立国家として歩みだしたばかりの建国期のトルコ共和国にとって、国の基盤整備は重要課題だった。これに即応するため、外国人建築家の就労を可能とする産業奨励法が一九二七年に制定され、その後、一九四〇年までの間に、ドイツやオーストリアを中心に一四名の建築家、都市計画家が公式に招へいされた。エルンスト・エグリ、クレメンス・ホルツマイスターに始まり、その後、ヘルマン・ヤンセン、パウル・ボナツ、アンリ・プロスト、ブルーノ・タウト、マルティン・ワーグナーなどがその一部である。これらの外国人専門家たちはトルコ共和国において、建築教育、都市計画、公共建築の設計を主として担当した。

トルコ政府が外国人技術者の招へいを行ったのは、ケマル初代大統領（建国の父アタテュルク）の欧化政策をつつがなく進めるためだった。近代化を目指して、ケマルは服装から文字、音楽、大学教育に至るまで西洋に倣う姿勢をとった。建築分野においても、モスクを連想させるドームや、ミフラーブを連想させるニッチなどを用いる第一次ナショナル建築様式ではなく、西洋の建築様式を求めた。しかし

史苑（第七一巻第二号）

トルコ共和国で活躍した外国人建築家（山下）

共和国建国当初は終戦まもない時期でもあり、自国に十分な人材や技術の蓄積がなかった。当時、トルコ人建築家の数は全国で一五〇人、その約半分である六〇～七〇人が最大都市イスタンブルに、新たに首都とされたアンカラには三〇～四〇人、イズミルには三人、アダナに一人、残りはその他の県に散らばっており、ケマル大統領の西洋化政策の下、新都アンカラの建設に対応できる専門家数が不十分だった。加えて、ケマル大統領の側近であったファリフ・ルフク・アタイのように、トルコ人建築家の水準を必要以上に過小評価した官僚が政府内にいたことも見逃せない。

外国人建築家は主として、高等教育機関または教育省実務局に着任した。中には両方を兼任した人物もいた。まず前者、すなわち高等教育機関での職には、芸術アカデミー（現ミーマール・スィナン大学）、ヘンデセイ・ミュリキイェ・メクテビ（現イスタンブル工科大学）など建築学科の教員、時には学科長の職も含まれた。中でもエグリは当時、建築教育の中心的機関であった芸術アカデミーの教授兼学科長であり、同校の教育実践だけでなく、教育カリキュラムの改革にも取り組んだ。芸術アカデミーで実施されたカリキュラム改革は、他機関にも変革の流れを生み、共和国期の建築教育の礎を築いたと評価されている。

後者、すなわち教育省実務局での職は、トルコ国内の官庁や教育施設の設計と建設であった。一九二七年、最初にコンサルタント建築家として着任した外国人は、クレメンス・ホルツマイスターで、その後、局長としてエグリやタウトが任務につき、大学や高校の校舎を手がけた。以上のように、高等

教育機関での教育実践やカリキュラム改革、および教育省での実務が外国人建築家の正式な仕事だったが、教育省の許可を得られれば、これ以外にも設計プロジェクトを受けることは可能だった。

共和国政府は、外国人建築家の力を借りつつ、西洋的な街並みの創出を順調に進めて行った。ケマル大統領が自らの欧化政策の中で具体的にどのような西洋建築を求めたのか、明確な言葉は残されていない。それを裏付けるかのように、この時代の公共建築のデザインには、トルコの伝統様式が避けられ、なんらかの西洋様式が用いられているのであればそれで十分という姿勢が読み取れる。外国人建築家の多くは、彼らの出身地の様式をそのまま首都アンカラに持ち込んだため、トルコの街並みには突然、中欧地方の建築が出現することになった。芸術アカデミーの教員でトルコ人建築家のセダト・ハック・エルデムは、アンカラの街並みに現れた中欧建築に違和感を訴え、新生トルコ共和国の新建築はトルコ独自の建築伝統の中から生み出されるべきであると説いた。それを阻む要素のひとつでもある外国人建築家に公共建築の設計が委ねられている状況に、疑問を呈した。

しかしその改善はすぐに実現するものではなかった。当時の社会ではトルコ人建築家が大規模公共事業を受注しづらい状況にあったからである。共和国初期のトルコ人建築家ゼキ・サヤルは、建築雑誌『アルキテクト』の中で、外国人建築家パウル・ボナツが国内の設計プロジェクトを巧みに受注していく様子を白日の下にさらしている。外国人建築家の活動は、それを優遇しようとするトルコ政府関係者の存在とも絡み合っており、サヤルは、ファリフ・ルフク・アタイのような一部の官僚が外国人建築家の質

トルコ共和国で活躍した外国人建築家（山下）

を見極めもせず登用することを疑問視し、専門家である建築家が判断する必要性を訴えた。建築設計競技が行われるのであれば、トルコ人建築家にも平等に門戸が開かれるべきであるとし、当時の閉鎖的状況の改善を訴えた。

トルコ建築界における外国人建築家の活動は、建築教育の場面では概ね肯定的に捉えられたものの、設計作品においては高く評価されたとは言い難く、二〇世紀後半には幕を下ろすことになる。しかし外国人建築家の作品に対する批判的視点が、共和国独自の新建築の探究という目標をより明瞭にしたと考えれば、その作品群もまたトルコ建築史において欠かすことのできない要素のひとつといえるだろう。

（本学文学部准教授）